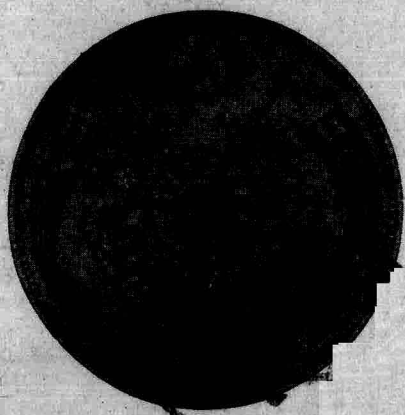


倭王の末裔 豊田有恒

河津書房

倭王の末裔



豊田有恒

河出書房新社

倭王の末裔

小説・騎馬民族征服説

©1972

580円

昭和四十六年十二月十五日 初版発行
昭和四十七年二月二十五日 四版発行

著者 豊田有恒

装幀者 木村恒久

発行者 中島隆之

発行所

株式会社 河出書房新社・東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話東京(〇三)二九二一三七一一・振替東京一〇八〇二一

印刷所

中央精版印刷株式会社

製本所

中央精版印刷株式会社

目次

第一章 女王卑弥呼

1	騎馬の民	7
2	谷那 こくな の鉄山 かなやま	26
3	氏族會議	44
4	楽浪の王女	55
5	決闘審判	77
6	遼東の出兵	94
7	邪馬台国	112
8	女王卑弥呼	134

第二章	神功皇后	139
1	任那の国	141
2	沙千彦の謀叛	149
3	広開土王	155
4	筑紫の国	160
5	播磨の国	175
6	忍熊の王	187
7	住吉の津	205
8	大和征服	226
9	応神王朝	244
第三章	太安麻呂	249

倭王の末裔

小説・騎馬民族征服説

第一章 女王卑弥呼

1 騎馬の民

木の間をわたる風が冷たく肌をさし、冬の到来の遠くないことを思わせた。朽ちた枯葉を踏みしだいて、馬蹄のひびきが近づいてくる。

それほど多くない騎馬の一隊である。先頭の白馬には、一人の若者が跨っている。黒鉄の鉢のついた胄をかぶり、動作の妨げにならない挂甲をつけている。その下には、白麻の筒袖の衣服をつけ、短い弓矢を手にしていた。

だが、騎馬武者とよべる扮装は、この若者ひとりだけであつた。あとにつづく者たちは、それぞれおもしろい癖の恰好をしている。獣皮だけしか着ていない者もあれば、漢の国のもらしい立派な甲冑の片袖だけをつけている者もある。さながら、まったく違う部族の者を寄せあつめたような、調和を欠いた服装の一群であるが、親しげに話しながらすすんでくるところをみると、ひとつの部族の者たちであることがわかる。

狩倉の戻り道にしては、不相応にもものしい扮装であつた。獲物といえるものは、若者の鞍脇にくくりつけてある雉一羽だけである。

「若卑狗、やはり、獲物はなかったではないか？」

鎧の片袖だけをつけた中年男が、若者のそばへ馬を乗りよせて話しかけた。部族の智者で、耆老という漢風の名でよばれている。漢の言葉で老人という意味であるが、実際はそれほどの歳ではない。漢語のかたことを口ばしたり、みように分別くさいことを言ったりするので、その名がついたのである。

「確かに、おれがまちがっていた。獲物がすくなかったのは、皆の腕がわるかったからではない。あやま

る、このとおりだ」

若卑狗とよばれた若者は、悪びれたところもなく、馬上で腰をかがめた。若卑狗は、かれらの族長の息子である。獲物をもたずに戻ってきた耆老の一行を、未熟な腕のせいだとのしり、自分から同行を求めたのである。だが、はたして、このたびの出猟も雉一羽を射とめただけという惨めな様におわった。こういった場合には、族長の息子であっても、いさぎよく己れの非を認めなければならない。それが、かれら騎馬の民の掟である。

「判ればよいのだ。われらの東には、斯盧の国ができあがり、境界を閉ざしておる。これまでも、獲物を追って深入りした仲間、一人も戻ってこなかったではないか」

耆老は胸をそびやかした。自分の腕の未熟のせいでない証がたったからである。

「斯盧の国だと？ そんなものを誰が決めた？ もともと、河向こうにも、おれたちと同じ騎馬の民が住みついていて、おれのお祖父のころには、境界などというものはなかったという。いつでも好むときに、獲物を追って入っていくことができたという。もちろん、獲物を奪いあって戦さになることもあったろう。あるいは、毛皮と鉄とを取りかえることもあったろう。だが、薄汚い土掘りどもといっしょになることはなかった。やつら、河向こうの連中は、骨をなくしてしまったにちがいない。土掘りどもの力を借りて、国などという不都合なものをこしらえ、のうのうと暮らしていくつもりなのだ」

若卑狗は、威勢のいい答えをした。かれら騎馬の民に国などというものはない。行くさきさきで獲物を求め、山に寝、野に伏すという毎日である。これまでも、そうして生きてきたのだ。もし、妨げる者があれば、土掘りであろうと、漢人であろうと、殺してしまえばいいではないか。

「若卑狗、祖父さまのころとは、時代がちがったのだ。東の斯盧の国ばかりではない。西には伯齊の国がおこり、やはり境界を閉ざしてわれらを締めだしておる。われら潞人は、立ちおくれてしまったのだ」耆老は、若卑狗をたしなめてから、きゆうに夢見るような目つきになった。「おまえは、楽浪の府へ行っ

たことがないから判らんのだ。漢人たちは、立派な服をきて、美味しいものを食っているぞ。何故だか判るか？ かれらは、土掘りどもを働かせて作物をつくらせ、食扶持をのこすだけで、収穫をとりあげる。漢の国では、これを租という。租として集めた穀物を、毛皮や鉄や碧玉と交換すれば、どのような栄華もおもいのままだ」

「おまえの話は、漢語が多すぎるから、難しくて判らん。いずれにしても、おれは嫌だ。欲しいものがあれば、殺して奪いとる。これが、おれたち騎馬の民のやりかただ。斯盧や伯齊など、どうでもいい。そんなやつらの真似をするのはごめんだ」

若卑狗は、言いはなつてから、枯葉のうえに唾をはきすてた。

斯盧の国——後の新羅である。当時、中国から辰韓とよばれていた南鮮東部のうちにある、ひとつの小国家であった。この国を支配しているのは、朴、昔、金という三つの姓からでる王であった。この三姓は、天降姓とも骨姓ともよばれ、もともと辰韓の地に土着していた人種ではないらしい。この王に対して卵から生まれたという始祖伝説をもつ辰韓六部の貴族たちが、服従している形である。この六姓は、土姓とよばれていることから判るとおり、土着の首長階層にちがいない。

天から降る、天の子であるというような始祖伝説は、明らかに騎馬民のものである。これに対して、巨大な卵から生まれたとする始祖伝説は、東南アジアのモンsoon米作地帯に分布する、農耕民のものである。つまり、米作を営んでいた韓族の土地に、北方から騎馬の征服者がやってきて、戦闘のあけく両者のあいだで妥協ができ、やがてスバルタのような軍事国家が完成したとみることができると。

伯齊の国——後の百済の前身であり、中国から馬韓とよばれていた南鮮西部にあったという、五十四国のひとつである。ここには、北方の高句麗から伝えられた、ひとつの開祖伝説がおこなわれていた。それは、夫余族の東明王という英雄の子にあたる温祚という王子が、慰礼城にやってきて百済の国をひらく物語である。夫余族というのは、南満州から半島北部にかけて分布した、典型的な騎馬民族であった。

斯盧^{いろう}の国とおなじく、騎馬民の征服王朝でありながら、伯齊の国の事情は、まったく異なっている。ここでは征服者の絶対数が少なかったらしく、近くにある楽浪郡の、あるいは以前に置かれていた真番郡の影響をうけて、中国王朝の縮小版のような百濟^{くだら}の国へと成長することになる。

この二国にくらべて、いちばん統一の遅れたのが、あいだにはさまれた弁韓であった。若卑狗たちの部族が入りこんでいる弁韓は、当時十二国にわかれていた。国といっても、先住の農耕民である韓族の村落共同体のようなもので、騎馬の民は、その埒外^{うちがわ}におかれている。

この地方へ流れてきた騎馬の民は、高句麗から辰韓にかけて多い濊人^{えじん}とよばれる種族の一派であった。魏志の濊人伝によれば、この俗は山川を重んじ、山川には各部分があり、みだりに入ることはできないとある。本来の濊人は、同系とみられる貊人^{みやく}としばしば一緒に論じられているが、もともとは夫余系^{ふよ}の騎馬民族である。だが、魏志にあるとおり、すでに漁撈權、入会權^{いりかいけん}の思想が発生しているところをみると、南鮮にうつったときには、もはや自由奔放な狩獵生活がでなくなっていたことが判る。他の土地にいた濊人の多くは、そこに定着しはじめ、農耕をまなびはじめている。

それにひきかえ、若卑狗の部族だけは、いまだに定住しようとせず、ひとり騎馬民の伝統にしがみついていた。したがって、行動範囲のなかにある弁韓十二国に対しても、決して同化しようとはせず、収穫のたまった頃を見はからって部落を襲い、穀物をまきあげて引きあげていくという、野盜のような生活をつづけていた。他の地方の騎馬民のように、その土地に根をおろし、農民を管理し搾取するまでには至っていないからのである。

族長の息子の率いる十人ばかりの一隊は、獲物をもとめてあてどなく丘をのぼっていった。葉をおとした木々がつづくばかりで、どこまでいっても同じような景色であった。

丘をのぼりつめたところで、だしぬけに若卑狗は馬をとめた。はるか向こうの枯林のなかに、一頭の鹿を見つけたのである。この豪勢な獲物を仕止めれば、大手をふって野營地へもどれるであらう。

「続け！」

若卑狗は早くも馬を駆けさせ、右手に矢を左手に弓をとりあげている。走りながら馬上に立ちあがり、一矢を射かける。だが、矢頃には遠い距離である。浅傷を負った鹿は、背中に矢をつきたてたまま、一目散に走りはじめた。鹿が弱るまで追いつづけ、とどめを刺さなければならぬ。

若卑狗の白馬を先頭にして、一行は鹿を追いかけた。枯枝に打たれぬように、馬上で身を沈めながら丘を駆けおり、急な斜面をくだっていくと、大河の岸辺にでた。

追いつめられた鹿は、一丈ばかりを跳びこえ、河中へおどりこんだ。若卑狗は、手綱をひきしぼって停止し、岸頭から河面を見おろした。馬もろとも跳びこめる高さではなかった。下流へまわって、流れに押しながされた鹿にとどめをさすことになろう。

騎馬の一行は、くると馬首をめぐらし、灌木の叢みをぬけて、河に沿って走りだした。下流へ行けば平坦な岸辺にでることを知っているからである。

迂回した騎馬の一行が、下流の浅瀬に馬をのりいれたとき、あの手負いの鹿は、水面のどこにも見あたらなかった。対岸の河瀬に目を転じると、数十人の土掘りどもが現われ、竹桿をあやつって鹿を引きあげているところであった。

「おのれ、土掘りども！」

若卑狗は激怒した。かれら騎馬の民の掟では、狩の獲物は斃した者の所有になる。たまたま山中で他部族の者とでくわしても、この掟はかたく守られる。それが争いになるときは、獲物を斃した者がいずれとも判りにくい場合である。力尽きて死んだ鹿を、こともあろうに土掘りどもなどに横奪りされてなるものか。

若卑狗は、浅瀬をわたり、本流へ馬をすすめた。他の者も、それにつづいた。水を蹴たててすすむ騎馬をみるなり、臆病な土掘りどもは、算をみだして逃げだすにちがいない。すくなくとも、これまでは、そ

うであつた。

「待て、若卑狗」

耆老が追いついてきた。そして、片袖だけの鎧を鳴らしながら、あきらめろというように手を振ってみせた。

「止めるな。おれの仕止めた鹿だ。奪いかえしてやる」

若卑狗は、なおも馬をすすめた。激流にはちがいないが、乗りきるだけの自信があつた。耆老たちも、巧みに馬を操りながら、深みへ入りこんだ。

だが、対岸の土掘りどもは、意外にも逃げようとしな。河原に引きあげた鹿のそばをはなれ、いっせいに叫び声をあげた。

「やつら、戦うつもりにちがいない！」

耆老は、水音にまけぬくらいの大声をあげた。

この大河——洛東江は、辰韓と弁韓の境界をなしている。この地方にいる先住農民の韓族の言葉は共通している。これに対して、西の馬韓の農民は、ちがう言葉をはなしていた。ひとくちに韓族といつても、南鮮一帯にいた農耕民の総称であり、かならずしもひとつの人種ではない。弁・辰にいた韓族を、仮りにインドネシア系の米作民とすれば、馬韓のそれはポリネシア系の米作民であつたかも知れない。

ここで、耆老が対岸の土掘りの言葉を理解できたのは、洛東江の兩岸で同一の言語がつかわれていたからである。

「なんだと、土掘りどもが戦うだど？」

若卑狗は訊きかえした。そんなことが、あるはずがなかった。かれら騎馬の民が暴れこめば、女のようにふるえあがり、おとなしく穀物をさしだす。それが、若卑狗の知っている土掘りであつた。

だが、耆老のいったことは、嘘ではなかつた。対岸の土掘りどもは、二列に立ちならび、いっせいに矢

を射かけてくる。一の矢を射はなした前列がしりぞくと、うしろの列がすすみでて二の矢を放つ。そうしているあいだにも、向こうの森のなかから、戟こしや弓をもった男たちが、応援にかけつけてくる。

「ひくな！ すすめ」

若卑狗は、飛んでくる矢をはらいながら、部下を叱咤した。激流の中央で馬を乗りしずめなければならぬので、すこしも進むことができない。土掘りのはなつ矢は、狙いも不確かなうえ弓勢ゆんぜいもよわいのので、かろうじて防いでいられるが、なにしろ数が多い。若卑狗の一行は、すこしも対岸に近づけぬまま、水流に押しながされはじめた。

「ひくな、河岸をかけあがって、いっきに蹴かちらせ」

若卑狗は、士氣をあおるため、やたらに喚こゑきたてるが、命令は空まわりするばかりである。すでに下流はるかに流されている者もある。浅瀬のほうへもどろうとして、背に矢をうけて転落する者もある。このままでは、矢をうけて全滅するか、馬もろとも溺死するかしかない。

とうとう、族長の息子は、馬首をめぐらせた。ようやく、もときた岸にはいあがったとき、一行は人馬ともに疲れはてていた。しかも、仲間の一人は、矢の当たり所がわるかったとみえて、水におちたまま姿を消し、空馬が戻ってきたにすぎなかった。

対岸の土掘りどもは、これ見よがしに勝鬨かつどもをあげ、棒にくくりつけた鹿をかつぎあげ、森のなかへ去っていくところであった。

「判ったか、若卑狗。やつらは、もはや以前の土掘りではない。斯盧しろうの国民くんにんなのだ。騎馬の兵が守ってくれぬときは、おのれの力で守ろうとする。弓矢の扱いも教えられた。戟の振りかたも学んだ。だから、昔のようにたやすく殺せぬようになったのだ」

耆老きらうは、はずむ息を押さえながら、族長の息子にいきかせた。

「なぜだ、なぜ、臆病な土掘りが、戦うようになったのだ？」

「それは、^{スルー}ス盧の国にいる騎馬の民が、やつらをむやみに殺さぬからだ。土掘りのつくった穀物のうち、必要な分をとりたてるだけで、残りを返してやるからだ。しかも、敵が攻めこんできたときには、騎馬の民が守ってやる。見ろ、あそこを！」

耆老は、岸辺にすわりこんだまま、対岸を指さした。そこには、二十騎ばかりの一隊があらわれ、こちらをにらんでいる。おそらく、土掘りの知らせをうけて、駆けつけたものであろう。^{スルー}ス盧の国の騎馬である。

「おれには判らぬ。なぜ、土掘りどもを守ってやらねばならぬのか？　なぜ、やつらを殺してしまわぬのか？」

若卑狗は、頭髮をかきむしって、叫びたてた。耆老にむかって問いかけたというより、自分を責めているような口調であった。

「よいか若卑狗。土掘りを殺してしまつたら、誰が穀物をつくる？　やつらに穀物をつくらせ、わたしたちに必要だけでもらう。そのかわりに守ってやるのだ」

「嫌なことだ。土掘りから施しは受けぬ。この土地の土掘りが死にたえたら、つぎの土地へ移ればよい」
若卑狗は、反撥した。だが、この若者の心も、手痛い目にあつて、揺るぎはじめていた。

弁韓の東西には、^{スルー}ス盧、^{ペイズ}伯齊の兩國がおこり、兩韓の全域にわたつて、それぞれ統一を押しすすめている。それに対して、弁韓だけが遅れをとっている。かつて、若卑狗の父は、馬韓に本拠をかまえ、^{朝鮮}朝鮮の土地を駆けまわり、狩や掠奪によって部族を維持していた。だが、馬韓の伯齊の国との対立によって、土掘りと同化することを潔しとしない孤高の部族は、この弁韓十二国のなかで、勝ちままに暮らしている。かれらは、騎馬民に特有の精悍さを保ちつづけている。かれらからみれば、土地に定着した他の部族は墮落したとしかみえないが、時代は大きく変わりつつあり、結果的には、かれらのほうが取りのこされた